

アルパック ニュースレター



市民参加による花壇づくり (本文中に関連記事があります)

アルパック ニュースレター もくじ

1999年11月1日

- 京都府立京都高等技術専門校がオープンして
2年目を迎えようとしています 2
- 「あしぎぬ大雲の里」の施設が完成しました 4
- 不動産証券化と市街地再開発事業 6
- 京都駅北口広場が完成しました 8
- 改革のダイナミズム 9
- 「削ろう会」が開催されました 11
- 市民協働のメダカ飼育ボランティアを始めました 12
- 「カンボジアで考えたこと」 13
- 新刊旧刊書評紹介 15
- まちかど 16

NO.98

京都府立京都高等技術専門校が オープンして2年目を迎えようとしています

前田 怜嗣

我が国の完全失業者数は295万人で、前年同月に比べ59万人増加。完全失業率は前月と同率の4.3%で、昭和28年以降で最高となっている中、京都府立京都高等技術専門校がオープンして、2年目を迎えようとしています。

平成10年春のオープン以降、外構と解体工事等の整備を平成10年～平成11年にかけて行い、ようやく落ち着いてきた感じです。専門校は、第4次京都府総合発展計画及び第5次京都府職業能力開発計画で示された基本的な方向に沿って職業能力開発を推進するとともに、京都府産業を支える人材を育成するための専門校として整備されたものです。この事業は、我々が関わっただけでも、平成4年～平成11年春までと、8年もの歳月が流れておりその間、阪神・淡路大震災があり個人的にも、流れていった時間の中で色々と思いをよぎるものがあります。

専門校とは職業訓練施設で、職業能力開発促進法で定められた施設として、労働省の管轄の校となります。専門学校といたいところですが、文部省管轄のものでないと学校という名称をつかえないということで、校となっています。

場所は、京都市伏見区竹田。鴨川の左岸に

隣接しており、JR東海道本線、名神高速道路という国の東西を結ぶ2大交通幹線の間位置しています。京都駅からは、京都市営地下鉄烏丸線を利用してアクセスでき、地下鉄水鶏橋駅を出てすぐ目の前という便利な場所にあります。

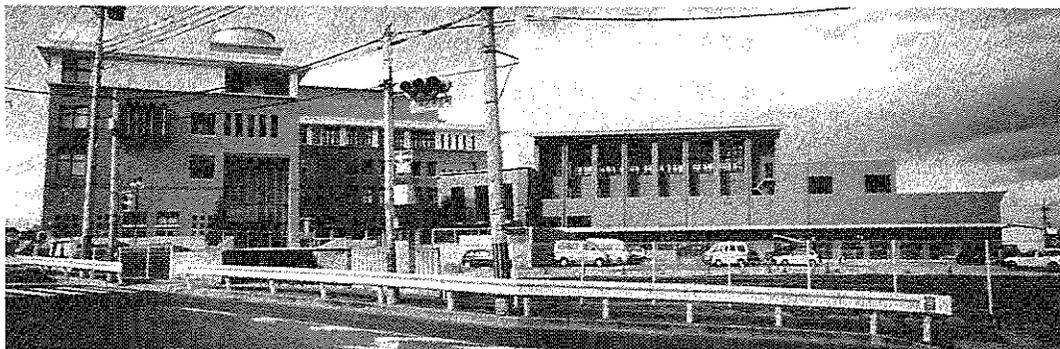
施設としては、伏見区の水鶏橋にあった京都府立高等技術専門校と西院にあった女子高等技術専門校との統合校です。伏見区の水鶏橋の旧校舎で授業を行いながら、新校舎として隣接地の府有地へ建設しました。

【施設概要】

・敷地面積	9,928㎡
・建築面積の合計	4,797㎡
・延べ面積	12,129㎡
・階数	4階
・構造	SRC+RC
・棟数	7棟

統合・建て替えの背景としては、旧校舎の老朽化、狭あい化が一番にあげられ、ハード的には施設集合による、効果的な施設への投資と集合整備のメリットを活かした機能の充実が求められました。

ソフト的な背景としては、技術革新、情報化が進展する時代の中で、職業能力開発の二



学校外観



(建築科実習教室)

建築科は、木造軸組工法の知識・技術も学べるという事で、実習教室内で2階建の模擬家屋を建てられるようになっています



(印刷デザイン科・商業デザイン科)

従来通りの印刷の知識から、DTPに対応した知識・技術が習得できるように整備されています

一ズも高度化・多様化してきていること。養成・能力再開発訓練については、技術・技能の一層の高度化・複合化に対応した人材育成が求められるとともに、新規学卒者の減少、女性の職場進出等労働供給構造の変化への対応が求められていることなどがあります。

その中で、私が一番統合してよかったと感じたのは、新設科ができ施設が新しくなったことももちろんありますが、シンプルな話、旧来であれば、実質的には男子校であった京都高等技術専門校と女子校であった女子高等技術専門校の統合で、男女共学となったことにより、オープン後は校自体が生き生きしていることが実感できたことです。また、訓練生の年代も幅広くなり、社会へ幅広く接する専門校として実感できることです。大学でも男女共学になったことを全面的に売り出しているところもこの春お見受けしましたが、こんなに変わるものかというのが私の実感です。また、1999年4月の京都新聞に掲載された

「職業訓練校に増える大卒者」という記事も象徴的で、短大・大卒者の占める割合が1994

年には101人の定員中6人であったのが1998年リニューアルオープン時には、249人中69人と28%。1999年には35%となっており、建築設計・インテリア科にあっては、19人中18人という数字が出ていましたが、昨今の時代背景とともに特徴的なエピソードといえるのではないのでしょうか。

訓練科目の設定については、府も色々とお苦勞され、業界の人材不足に合わせて訓練科を設定しても訓練生が集まらなかったり、就業先はあまりないが、生徒にはすごく人気の高い科があったりと、トータルにバランスをとりながらの設定に頭を悩まされていました。最終的には、以下の10科での整備となりました。

1. 情報処理科 (新設)
2. メカトロニクス科 (新設)
3. 機械加工科 (新設)
4. 自動車整備科
5. 建築科
6. 建築設計・インテリア科 (新設)
7. 印刷デザイン科
8. 商業デザイン科 (新設)
9. 洋裁科
10. O A 事務科

教室構成

室構成は、10科それぞれに座学の教室と準備室が内包された実習教室があり、共通の教室として体育館や学生ホール、共用の教室と管理部門があります。

各科の実習室は、科によっては教室というよりは、ファクトリーといった方が相応しいといえます。また、色々な実習機器もあり教室の中に入るとワクワクします。

最後に、色々な面で難工事でありましたが、皆様のお力で一区切りつき、感無量です。京都高等技術専門校のますますの発展をこころより願っております。

(京都事務所 まえだ さとし)

「あしぎぬ大雲の里」の施設が完成しました

金井 萬造

あしぎぬ大雲の里の施設の完成

去る、9月9日の重陽の節句の日に京都府大江町「あしぎぬ大雲の里」の中核拠点施設である「大雲塾舎」、「鬼力亭」の完成記念式典が開催され、翌日から営業がはじまりました。

一足先に整備が完了している大雲記念館と併せて、大きな機能を発揮することが期待されています。「あしぎぬ大雲の里」は、京都府北部を貫流する由良川の河畔に立地しています。由良川は古来より水運、漁業、農業など地域の生活や産業に多くの自然の恵みを与えてきました。その一方で、出水による多大な被害を地域にもたらしてきました。

「あしぎぬ大雲の里」は、自然との共生をテーマとして由良川流域全体の人と川との望ましい関係を取り戻すための大きな構想の中で計画され、交流、体験、学習をキーワードに大江町と有路（地元）の歴史、自然、文化、産業を体現する施設、機能の一環を担うものです。

施設の概要

一足先に整備された大雲記念館は明治42年に建築された「旧平野邸」を再生、利用したもので由良川を眺望する国道175号沿いの一段高くなった位置に建っており、明治時代の由良川流域の歴史を知る上で一見に値する施設です。京都府の有形文化財にも指定され、伝統的な民家形式と多彩な座敷構成になっています。施設は文化、学習、交流の機能を担い、和室研修室、茶室、庭園、ギャラリーなどの構成になっています。

今回、完成した「大雲塾舎」、「鬼力亭」

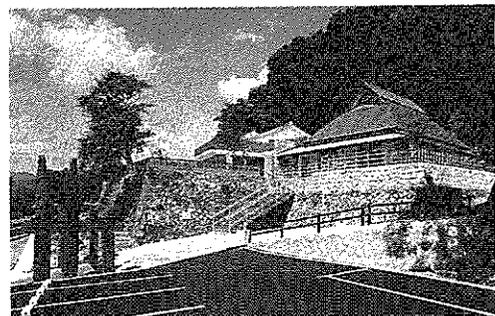
は、それぞれ宿泊研修機能、レストラン機能をもっています。

「大雲塾舎」は、サロン、研修室、浴室、宿泊室から構成され、由良川を一望する環境の中で、研修や宿泊することを目指しました。

「鬼力亭」は大江町の鬼伝説にちなんだ雷神が好む山の幸、風神が好む野の幸、水神が好む川の幸など地元の食材にこだわり、由良川流域の自然の素材をふんだんに使った仙人料理をテーマにしたレストランで佐藤町長の大江鬼伝説への思い入れが感じられます。メニューは健康によく話題になりつつある「えごま」を利用した料理、仙人御膳、各種の地酒など豊富です。地元の食材にこだわった食の提供は「鬼力亭」の大きな特徴であり、大江町を訪れる人に食の楽しみを満喫させてくれます。

「あしぎぬ大雲の里」の計画のねらい

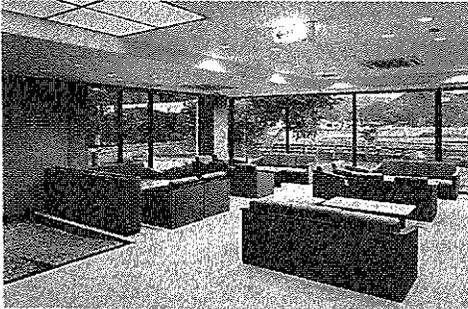
大江町では地域振興第一の拠点として、北近畿タンゴ鉄道の大江駅という町の玄関に町のシビックゾーンとして鬼瓦公園（広場）、町役場、文化施設、第二の拠点として山の里・鬼伝説の里として、酒呑童子の里が整備され、鬼の博物館、体験施設、宿泊施設などが整備されてきました。今回は第三の拠点とし



「大雲塾舎」外観



「鬼力亭」



サロン・ロビー

て由良川流域という広域圏軸に整備されるものであり、従来の整備地区の機能とも連携して地域振興に貢献しようとするものです。

この整備により「水害常襲・過疎の町」から「恵みの川、由良川あしぎぬ大雲の里」へと展望を図り、キャッチフレーズとして「人づくりと産業文化おこし」の拠点の役割を担うものです。これを確かなものにしていくためには、住民参加、住民主体の地域づくりは不可欠であり、これらと一体にすることにより、総合整備効果を発揮されたことになり、意欲的な課題への挑戦が特徴です。今後もこれを遂行していくための努力と協力が必要になってきます。

「あしぎぬの里」の計画は、4つの大きな目標をもっています。第一は食文化と仕事おこし、第二は遊び、交流、体験、第三は丹波文化の再生と創造、第四は人材の育成です。今回の整備はこれらの目標に対して中核となる機能をもつものです。京都北部の中丹地域のほぼ中央に位置する大江町は、周辺の福知

山市、舞鶴市、宮津市、綾部市があることから、これらの広域地域の研究研修ゾーンの機能により広域的役割を發揮し貢献できる可能性をもっているとも考えられています。大雲の里構想は、このように大きな展望をもつゆえに施設整備に引き続き前向きな取り組みが求められているといえます。

施設の利活用と里整備を推進させる課題

各市町村で各種の施設整備が進められる中で、計画どおり施設が利活用されて地域の活性化に向けて役割を發揮しているかどうかは課題となっているケースが多く見うけられます。大雲の里の場合は、計画時点で地域の各種資源に着目し、資源の活用に留意してきました。

また、計画的段階においては、町単位と地元単位で委員会をそれぞれ設置し、連携して活動を進めてきました。今後は、施設の運営と経営、集客と各種事業、イベントの企画などのアクションプランの実行体制づくりが重要になっています。まさに地域空間と地域の各種資源をフルに活用した「地域経営」の具体的段階になってきているといえます。

大雲の里の場合、由良川、周辺農地の活用、地元有路集落の資源の活用と連携が課題でもあり、施設と連動する屋外の広大な農村空間のフィールドミュージアム整備と機能の有機的連携による総合力の發揮をめざす時、その波及効果が期待できる状況となっていくと考えております。同時に私共まちづくりコンサルタントとしてこれらの展開に向けた努力、地元との協力、役割發揮が求められているといえます。

現在、由良川懇談会、川の駅構想、下流域との連携、事業企画と集客施設に向けて努力を傾けていきたいと念願しています。

(代表取締役社長 かない まんぞう)

不動産証券化と市街地再開発事業

山本 昌彰

バブル経済の破綻からもう何年も歳月がすぎましたが、市街地再開発事業では、不動産市況低迷の影響を大きく受け、事業費の大部分を賄う保留床が処分できないという深刻な状況が続いています。こうした傾向は、土地の含み益に期待できない現在、これまで保留床処分先とされていたデベロッパー等が、金融機関から容易に融資を受けることができなくなり、再開発事業の保留床購入行為のみならず、不動産事業そのものへの介入に萎縮する向きがあることなどに要因があると思います。今後、これまでの右肩上がりの地価上昇が期待できないのであれば、土地の含み益をもとに借入金に依存する従来型の開発主体の方法では立ちゆかず、資金調達法そのものの再考に迫られることとなります。

一方、不動産業界では、いわゆる「金融ビッグバン」の流れも受け、近年「不動産証券化」という言葉がにわかに脚光を浴びてきています。私は、「不動産証券化」に関する専門家でないので、このようなテーマを取り上げるのには、いささか僭越の感がありますが、昨年度、「不動産証券化と再開発事業」に関する調査研究業務に携わる機会がありましたので、今回は浅学を省みず、私論をまとめました。

「不動産証券化」の利点は端的に言えば、①小口化され、事業者と投資家が直結されることにより、不動産の流動性・換金性が高まる。②所有と運営の分離を図ることにより事業リスクが分散される。などがあげられます。今回のテーマは、率直に言えば、その「不動産証券化」を市街地再開発事業の新たな資金調達法として活用できないかということです。たしかに最近、これまでの企業の信用力をべ

ースとした「コーポレート・ファイナンス（企業金融）といわれる間接金融」から、資産・プロジェクトをベースとした「ストラクチャード・ファイナンス（資産金融）といわれる直接金融」への構造転換していく新しい動きが着目され、その導管体であるSPC（特定目的会社）に関する、いわゆるSPC法の制定など、まさしく「不動産証券化」のための環境は整いつつあるといえます。しかし、これまでも多くの専門家により、既に指摘されてきているように、現在のSPC法では、税金の問題、資産の入れ替えができない、借り入れを起こせない、優先出資部分についての増減資ができないなど、まだまだ多くの不都合を抱え、その環境は充分とはいえません（今後、制度の改正によってこれらは改善されていくでしょう）。また、そもそも「不動産市場」には、借地・借家をめぐる諸制度や慣行、および、利回り等の判断材料のもとになる賃料などの情報開示について、あるいは不動産関連税制などの非固定性について等、投資家にとって不確定要素が多く、今後、不動産を投資商品として普及させていくためには、場合によっては旧来からの発想の転換（法制度の改正等）も必要と思われます。

さて、仮に今後その不動産市場において証券化が普及していくことを前提にして、不動産証券化は再開発事業にどう活用できるのか。しかし、実はここにも多くの問題点を抱えています。通常、市街地再開発事業には、合意形成などに多大な時間を要し、とくに初期段階では、事業スケジュールの見通しが立たないことが多く、また共有や区分所有などの権利形態についてもその管理に伴うリスクが大きいなど、概して投資家が投資に躊躇する要

因が多いのです。SPCが不動産を取得して資産対応証券を発行し、その利払いや償還を行っていくためには、その不動産に安定したキャッシュフローが必要となりますが、一般的な再開発事業のように、事業スケジュールが不安定で、そのキャッシュフローの見通しが読めないような事業には投資家も投資しないでしょう。こうしたことで再開発事業は、投資対象商品としては、(他の金融商品よりリスクな)一般の不動産事業の中でも、さらに大きくハンディを負ったものといわざるを得ないのです。

では、再開発事業は本当に投資に向かない「商品」なのでしょうか。再開発事業の投資商品としての問題点が上記のように①事業スケジュール、②権利形態と大きく2つあるとするならば(これだけではないと思いますが)、まず、一つ目の事業スケジュールについては、直接的に対処を施す(コントロールする)のには限界があると思います。したがって、再開発事業の開発行為が終わり、事業の成否や運営主体の資力信用等に関し、投資家が納得できるだけの材料が揃わないことには、「証券化」も難しいでしょう。そこで、未開発・未利用物件だけでなく、事業進捗の異なる(もちろん、事業完了を含む)再開発事業、あるいは優良物件をも含むいくつかの事業がプールされた集合体を構築して「商品化」すれば、その未開発・未利用の再開発事業の単体ビルを間接的に証券化することも可能となると思います。これは、極論的には、完成物件に対する投資資金によって、初期物件の事業費を賄うという仕組みといえます(ただし、一度にそのような集合体を構築できるか、そのプロセスなどが課題となります)。

2番目の権利形態の問題に関しては、再開発事業の宿命ともいえる課題ですが、投資商品としては権利形態の輻輳した物件は致命的

といえ、できるならば権利関係をクリアにした「商品」が望まれます。管理運営に対するリスクから投資家を保護しなければなりません。この具体的な対処法として、例えば権利床ビルと証券化する保留床ビルとを分離することが考えられると思います。SPCが投資家の顔を見ないで済むように、投資家にもSPCの関与するオリジネーターの顔を見なくてよいような環境をつくり上げる必要があると思うのです。

いずれにしても「不動産証券化」は保留床処分のための「魔法の杖」ではなく、やはり、再開発事業によるビル開発が不動産投資商品として一般金融商品と“対抗”していくためには、当然高い利回りが要求され、その将来のハイリターンに対する担保性を明確に提示することが求められます。まさしく再開発事業についても(当然のことではありますが)「良い商品のみが売れる」、これまで以上にドラチックな「優勝劣敗」の時代が訪れるでしょう。

以上のように、不動産証券化について、とくに再開発事業に適用するに至っては、まだまだ越えなければいけないハードルが多いと思いますが、そのひとつひとつは決して越えるのに不可能な高さではないと思います。

今後、「不動産証券化ビジネス」が市街地再開発事業における保留床処分の、ひいては、日本経済牽引のひとつの契機として役割を担っていくことは大いに期待されるところであり、そのためにも、我が国の市場ニーズに合わせたストラクチャーの組成が早急に求められるところと思われます。また、制度インフラの整備だけではなく、まず、民間開発の呼び水として、あるいは、一定の「リスク・テイカー」として、「不動産証券化」を活用した再開発事業への、公的機関の積極的な参画についても期待したいと思います。

(大阪事務所 やまもと まさあき)

京都駅北口広場が完成しました

中根 博一

平成11年7月に京都駅北口広場が竣工しました。当該広場は京都駅ビルの完成に引き続き、京都の玄関口に相応しい広場の実現を目指し、京都市の支援のもと、西日本旅客鉄道(株) (以下JR西日本)、京都市交通局、関連バス会社、タクシー協会等の関連事業者による整備がなされたもので、アルパックは、整備研究会、整備施設のデザインに関する基本設計、実施設計をお手伝いさせて頂きました。

駅前広場のデザイン提案に関して拙い能力をフル稼働させ悩んだことは、京都のもつ特性としての伝統・文化と先進性といった一見相反するテーマをいかにデザインとして消化するか、圧倒的スケールをもつ駅ビルのデザインコンセプトとの調和と対比をいかにしてとるか、また豊かな緑景観をいかに創出するかということでした。この京都らしさを色では裏かきわの手法、フォルムでは、三山の稜線の曲線や条坊の軸性、家並み等がおりなすリズムやバランス感を意識し、光では柔らかな、間接的な光の演出の他、装飾性や遊びもとり入れました。残念ながら3つ目の緑景観の創出については駅前広場のほとんどに地下街が整備されており、地下街のスラブとのクリアランスが1m以下という状況で植栽(特に高

木) 環境としては最悪な条件下のため生育が期待できず緑の量的確保に限界がありました。しかし、それでも常緑樹、落葉樹、実のなる木等を駆使し四季の移ろいが感じられるよう配慮しました。

なお、広場は大別すると東西のゾーンに分けられそれぞれ性格が異なります。東ゾーンは比較的空間の広がりがあるゾーンで、集散する人々にゆとりと安らぎをもたらすように、緑を集中的に配し、植え込みにも曲線を意識したアンジュレーションをつける他、緑のライトアップによる空間の奥行き、ゆとりや緊張感をつくり出す光の演出を図り、光の質についても「ゆらぎ」を入れるなどしております。

また、西ゾーンは、バスターミナルを中心とした施設配置の機能性を重視するゾーンで、軽快感と明るさが感じられる膜構造のシェルターを採用し、京都らしいフォルムを重視して伝統的造形(唐破風・むくり・格子等)を内在させました。夜間には膜を透過した柔らかな光が浮き上がるよう照明を計画し、駅ビル等からの俯瞰景観も意識したものとしました。

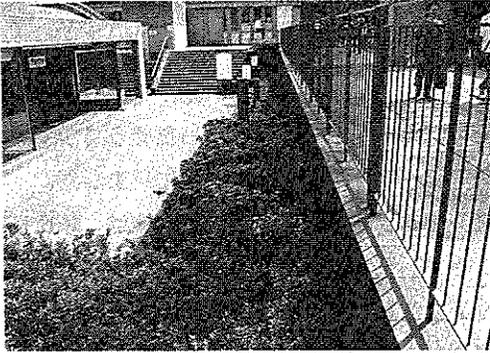
設計者の思いだけを書きましたが、できあがった広場が一人よがりかどうか一度ご覧いただき率直な意見を聞く機会が多くあれば幸



シェルターとライトアップされる樹木と照明



シェルターの膜構造と間接照明



サンクンガーデンの植え込みと手廻をイメージした
ゆらぎの照明

いです。

最後に、誌面で失礼ではありますが、施主であるJR西日本や各事業者の皆様と、ご指導や率直なご意見を頂いた京都市副市長をはじめとする京都市関連部局の方々、植栽計画をご指導頂いた京都造形芸術大学の中村一教授、照明計画・設計を担当して頂いた内原智史氏に深く感謝する次第であります。

(京都事務所 なかね ひろかず)

きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況 きんきょう 近況

近況

改革のダイナミズム

三輪 泰司

皆さん、おかわりございませんか。10月に入っても蒸し暑い日が続き、急に寒くなったり、尋常ならぬ地球の気候です。夏風邪をこじらせて消耗しました。9月末ドックで定期点検。どこも何ともないようでした。10月4日に大学の同窓会45周年。もうこんな話しゃめようやといいながら、すぐに健康状態の話題に戻る。困ったもの。

そんな中で、明るく、爽やかな話題も。

中身が凄いと、体裁も力強く

9月4日、関西学研都市ハイタッチ・リサーチパークの積水ハウス総合住宅研究所で、西山卯三記念・すまい・まちづくり文庫の第4回総会と、NPO法人設立総会が開かれました。1995年7月に設立されて4年間、膨大な図書、資料から映像まで、全てボランティアで整理され、研究所の1階に公開されています。その威容に圧倒されます。この図書・資料の約半分は、先生ご退官後、アルバック京都事務所の分室で、お預かりしていました。驚くような文献がありました。しかしどこからどう手をつけたものか、と心配していましたが、こうして明快なコンセプトに従って整理されると力強く生きてくるものだと、皆さ

んのご奉仕に感動しました。

もう一つの感動は、10月4日、京都造形芸術大学全学集会。新大学設立へ文部省認可が見えてきましたので、大学と学生自治会の共催で情報開示と討論。芳賀学長のあいさつに続き、徳山理事長が「京都文芸復興—新大学宣言」を發しました。大体育館は、千名を超える若者達の静かな熱気に包まれました。

改革はどこでも容易ではありません。情勢認識、現況批判、芸術教育とは何か、1年半の時間と構えで到達した、結果としての「宣言」です。改革運動は、現行の仕事と並行しての過重な事業です。総合計画や観光開発の審議会でも取りましたが、議論するだけでなく、自分がやるという人が出たところから実行する方法です。海外サマーセッションや、入試説明会といういわば“営業”活動に、全員が参加し行動した、その汗の結果の姿です。

中小企業と女性

10月は「21世紀を目指す企業経営」というたいそうなテーマで、龍谷大学経営学部特別講義を小谷隆一(株)イセト一会長、辻理(株)サムコインターナショナル研究所社長、小林祥一日本電気化学(株)社長と4人で、3回ずつ担当しました。コーディネートされたのは北沢康男教授です。

講義をしながら、中小企業の特質は独立独歩といわれるが、その行動様式の特徴は、縦

横斜めの連携・協同・ネットワークにあるのではないかと学びました。

アルパックは、小集団のアソシエイツとっていますが、どうなっているか。ここで、少し余録になりますが、以下は家内が書いた近況報告。題して「女性が元気」です。

10月7～8日、中小企業家同友会の全国女性交流会が函館であり、出席しました。“新しい時代を拓く女性たち”というテーマで、490名が参加しました。

1日目、全体会議に続き8つの分科会。私は大分の後藤さんの“経営者夫人の気持ちをわかって！—よきパートナーになりたい”という第2分科会に入りました。経営者夫人はパートナーか、サポーターか、いきなり活発な発言にびっくりしました。「それは考え次第、要は適材・適所。能力第一。中小企業の経営者夫人は、総務にかかわることが多い。ただの事務であるか、本来総務は全体が見えるから会社のカナメだと自覚して判断力・行動力を発揮するか本人の資質・能力と、それを見抜き、活かす経営者によって会社と個人の運命は決まる。そんなこといってもまだ経営幹部は、圧倒的に男性。凡庸な男性幹部は女性が強くなってもらっては困るのと違うか、等々、皆さんはつきりしています。

2日目「変わる女性、とまどう男性—男女共生社会へ向けて」と題する、札幌学院大学の布施晶子先生の講演で、その答えが浮かんできました。総理府はいろんなことを調べているようで、「同じ相手と再度結婚したいか」という質問に男性の70%は Yes、女性の70%は No。問題は男性がこの事実気づいていないこと。女性は嫉妬深いというが、男性のやきもちの方が強いという調査もある。こんなこと意識の底に沈んでいるのです。しかし、若い女性は、沈んでいなくて才能を表に出し、

積極的に行動します。

報告はもっと続きます。途中でエスケープして、朝市を覗きに行っていたようですが、分科会報告としてごまとめていました。

1. そうはいつでも圧倒的な女性は、家庭にこもり、大集会で発言どころか、出たこともない。会社でもいわれたことだけしている方が楽だと思っている。条件をつくり、潜在している能力を引き出すのは、リーダーの問題。女性リーダーも同じである。京都から参加した女性経営者を見ると、女性社員を連れて来て、一緒に学び、楽しんでいる会社は、やはりいきいきしている。

2. 男性のやきもちは、激しい競争の現れだが、責任のがれ、人のせいにする、足を引っ張り、保身へと進行すると、個人は転落し、企業は命とりになる。男女共生社会とは、この“男性”が女性にも適用されること。現段階では、女性を活かすかどうかだが、その予防法。

女性を活かすのは年功序列を破ることと一体のこと。30歳代でも能力ある人をリーダーに登用できないようでは、女性に登用しているといっても型だけになる。

何故、中小企業家同友会の女性部会に入ったのかと聞きますと、経営者夫人でも入れてくれて、女性経営者と“平等”に扱われるからだそうです。

中小企業とダイナミズム

10月12日、けいはんな都市OB会第2回総会で、4月にオープンした情報通信研究開発支援センター（ギガビットラボ）を見学しました。大容量データを高速通信する光ファイバー網の活用が期待されます。

お向かいの若奥さん、赤ん坊抱えてパソコンをやっています。子育てを終えたら職場復帰したいと。町内会のニュースづくりも手伝

ってもらっています。

情報ツールの進化は女性の時代を促進します。パソコンは腕力を要しません。コストも下がり、大企業・中小企業、更には家庭婦人まで平等になります。中小企業本来の連携・協同・ネットワークをつくりやすくします。「中小企業の時代」への物的条件も整ってきたといえます。

中小企業の方が、トップがその気にさえなれば、リストラではなく、社員の能力を活かし、男女共生を進め、ダイナミックな改革を起こすことが容易です。

因みに、アルバックでも態勢を整えていますので、Eメールでのご意見・ご批判も承っております。

但し、かような具合に、出歩いておられます、お返事が遅れます。やはり、ニュースレターもなくすわけにゆかないようです。

(取締役会長 みわ ひろし)

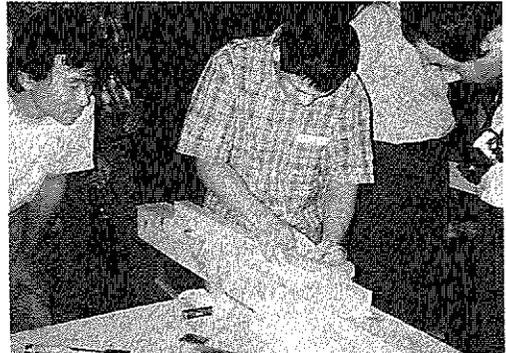
Eメール受付: ksuisin@arpak.co.jp

「削ろう会」が開催されました

西村 研二

名古屋港岸壁近く、昭和30年代に造られた鉄筋コンクリート造のふ頭20号倉庫。輸出入用の積み荷を保管していた倉庫がその役目を終え、今年の夏、期間限定でギャラリー、イベントスペースの「アートポート99」となりました。そのアートポートのイベントのトリを飾るのが9月25、26日に開催された「削ろう会」です。

削ろう会とは、鉋でどれだけ木を薄く削れるかにチャレンジするイベントです。ただそれだけの催しに全国から腕利きの大工や道具職人たちが駆けつけ、会も6回を重ねるよう



薄削り大会：ギャラリーも固唾をのむ



釘づくり実演：名人が鉋を釘に変えていく

になりました。このイベントの仕掛け人は名古屋を拠点に活躍する堂宮大工・杉村幸次郎さん。職人が腕を振るう場が少なくなっている中、杉村さんは「この会を行うようになってから、大工さんや道具職人さんが元気になってきた」と語ります。この削ろう会は匠の技を全国の同業者の前で試す場。寡黙と言われる職人さんも今日は饒舌で、お互い情報交換などに余念がありません。また、あたりでは即席の道具市が開かれ、道具職人が自慢の品を並べています。

さて、メインイベントの薄削り大会では、削りリスト（参加者）が念入りに調整した鉋を手に檜の角材に向かい合います。鉋を軽き木にのせ、ひと呼吸おき、鉋を引くと、見事に薄い鉋屑、もとい、削り花が咲きます。この削り花、達人クラスになると厚みは0.003mm程度。その削り花は木の細胞より薄いため、見た目はまるでナイロンストッキングのようで

す。そして角材はまるで鏡のようになめらかです。うまく削れないときはギャラリーと一緒に「あーでもない、こーでもない」と意見を言い合い、鉋を調整します。和気あいあいとした雰囲気の中、思う存分腕を振るう。メンコやビー玉と同じ技比べ腕自慢。熟練の職人が、そのときだけは少年に戻ったかのようです。

薄削り大会のほかには、子供たちによる大工のワークショップ、釘づくり実演（白鷹幸伯氏）、鉄づくり実演（高田良作氏）、基調講演（飯田喜四郎・明治村館長）などが行われ、一つ一つは紹介しきれないほど盛りだくさんのイベントでした。

（名古屋事務所 にしむら けんじ）

市民協働のメダカ飼育
ボランティアを始めました
馬場 正哲

この10月24日（日曜日）、尼崎の園田地区会館でメダカの飼育ボランティア説明会が催されました。公募で選ばれた120組の方にメダカを8匹ずつお渡し、飼育して増やしていただく事業のスタートです。市民組織の「自然と文化の森を楽しむ会」と市との共催です。楽しむ会を公募

かつて尼崎は、東洋のマンチエスターを標榜し、発展する工業都市の郊外園田都市として北部に向けて住宅市街化が急速に進みました。一方で、南部は地盤沈下や大気汚染の深刻化から公害のまちのレッテルが定着し、このイメージ脱却に今日も苦勞しています。

その北部園田地区は、私の幼い頃、この大きな変化の時代に、遊び育った第二の故郷です。昭和30年代前半まではラムネ色に透き通った藻川と猪名川に挟まれた、見渡す限りの

田園地帯でした。メダカ、タナゴ、ドジョウ、ナマズ、ザリガニやヒバリ、モズ、サギなど生き物も身近に生息し、私達子供等の楽園でした。この私が生き証人です。

楽しむ会は、尼崎市がイメージ転換を見据え、市政80周年の記念振興事業でとして、文化振興ビジョンに掲げられたこの園田地区の「自然と文化の森構想」に、市民が実験的な実践活動を行いつつ、構想づくりに参加するという、公募により集まった団体です。

残された貴重な自然に感謝

会は、この園田の自然や農業に培われた文化に親しむ活動から、地域の自然が市街化で後退し、特徴的で快適な生存環境や歴史の継承を脅かす段階に至っていること、その中で、保存運動で残された猪名川自然林と農業公園及び一体としての農空間が自然と文化の痕跡を留め、地域住民のみならず市民にとって貴重な資源であることを確認しました。

そして、市民自らがこの保全・育成に取り組むことの重要性を認識しました。特に、農空間は担い手の高齢化や都市化の下に存続の危機に瀕しており、自然との共生空間としての機能や農文化の伝承の重要性から、その保存支援が必要と考えました。市民による「森づくり」として、協働社会に向けた新しい地域づくりと生活創造に先駆的に取り組みむことが重要であることを確信しました。

メダカの復活から

楽しむ会の活動から、教育委員会の協力で市立尼崎高校の体育科新設に伴う猪名川公園のグラウンド整備に合わせて、西側外周で5m幅の敷地を提供いただけることとなりました。これを活用して、まずできることから始めようと、園田の自然の象徴であったメダカがいなくなっており、これを戻すためのメダカ池と、園田での農業の意味を見直そうとい



飼育ボランティアへ、メダカの引き渡し
頑張って殖やして下さい

うことから農業体験園をみんなでつくることにしました。将来は園田の水路や田圃にメダカをかえすことを夢見ています。

会の活動はこれだけにとどまりません。園田のメダカ探しから始めました。しかし、カダヤシは確認できましたが、メダカは見つかりませんでした。そこで、会員が集めた市内武庫川水系のメダカと芦屋の環境活動家の山田さんが同じく武庫川のメダカを増やしておられるのを提供いただき、楽しむ会で増やすことに挑戦しました。

大きな反響から広がりへ

次に、会で増やしたメダカで「メダカの飼育ボランティア」を募集し、地域での連携事業に拡げることし、広報で呼びかけました。大反響で100名の募集に約300名の応募があり、抽選で決めざるを得ませんでした。また、呼びかけの過程で、地域の小学校からも賛同をいただきましたが、お預けするメダカの調達が思うようにいきません。結局楽しむ会で増やしたものに、この年末に故郷鹿児島に帰られるため地元で育ててくれる人を探されていたメダカ飼育の達人である西宮の鮫原さん、芦屋の山田さんなどの協力を得て約1,000匹のメダカを集め、応募された飼育ボランティアに預けることができました。

開かれたネットワーク型地域活動に

この事業は、平成10年度から尼崎市の事業として行政主導で進められ、私どもが専門的な面で支援して活動してきました。公募によ



メダカ池づくり

る「楽しむ会」には、当初自然に対して意識の高い人やマニアックな人が集まりました。

「メダカ飼育ボランティア」事業など具体的な活動をとおして、歴史研究者や農業者など様々な人と団体の協力に恵まれました。メダカ池づくりには公民館活動で園田地区の親子の参加にも広がってきています。そして、漸く会の主体意識が芽生えだした段階です。

今活動をとおして、地域との関係が重要であることを痛感しています。地域には社会福祉協議会など既存の組織があり、行政や議会と強い関係があります。新しい地域組織として、既存組織と連携しながら、広く開かれた人と人との繋がりネットワークと地域主体の活動型環境創造の取り組みが、行政や企業とのパートナーシップの活動に、持続的に発展していくことを求められます。これからのがいよいよ本番です。

(大阪事務所 ばば まさあき)

「カンボジアで考えたこと」

吉田 久視子

タイのバンコクからアンコール・ワット遺跡があるシェムリアップというカンボジア北西部の村まで陸路で行くことにしました。

「安いから」という理由で陸路を選びました。実は、その時は知る由もなかったのですが、アンコールワットへは飛行機で行くのが普通



アンコールワット



カンボジア上空から見た風景

で、陸路は「98年4月にようやく外国人に解放され、まだ事故や強盗などの話しはないものの道路は非常に悪く、多くの橋は落ちているため区間によっては道路はなく、走れるところはどこでも走っていく」そんな道だったのです。

そんなことも知らない私は、タイの国境の街アランヤプラテートからピックアップトラック（4WDトラック）を乗り継いで国境を越え、カンボジアに入った時の気分は、全く爽快ともいうべきものでした。真っ青な空の下、トラックの荷台の上でカンボジアの微風と土埃を肌に感じながら、見渡す限りの湿原地帯に、私はとても感動していました。行く先々で、湿原の中に集落が現れます。水の上に家を建て、人々が暮らしているのです。自然にできたプール（池）で素っ裸の子供たちが水浴びをしているのが見えます。手を振れば、応えてくるのがとても微笑ましくもありました。「自然ってすばらしい！」って心の

底からそう思いました。

しかし、雨期も終りに近づいたカンボジアでは、その年に降った雨のせいで道はズタボロ、崩れに崩れ落ちていきます。平坦なところなんて存在しないほどに道路はデコボコ状態。それも普通のデコボコではなく泥沼状態です。泥沼から抜け出せないこともしばしば。皆、膝まで泥につかって車を引き上げなければなりません。日が落ちると、電気なんてもちろんなく、あたりは真っ暗な闇です。道はどんどんひどくなり、乗っている人はまさにDancing dollという表現がぴったりな様相になってきました。私はさっきの元気と興奮はどこへやら、もう泣きたい気持ちになってきました。結局、国境からシェムリアップまで200km足らずの道を、10時間以上もかけて走る結果になりました。

この陸路での移動は、私にちょっとした考え方の転換を与えてくれました。植生学を学んできた私は、自然を破壊する行為はすべて「悪いこと」で、人間はいつも自然に対して「負い目」を感じながら開発しているんだと考えてきました。しかし、この経験を経て、はじめて、人々が生活するための開発には必ずしも絶対的な「悪」とは言えないものがあるんじゃないかと思い始めたのです。カンボジアの湿地帯の真ん中にコンクリートの舗装道路を造れば、それは生態系を分断することになりかねません。でも、そうすることで、地域の人々の生活がちょっとスムーズになるのです。便利な生活に慣れた自分が、便利でないと生活してみても、全部が全部、悪いこととは言えないのかあと、正直に思いました。たかだか10時間ですが、崩れた道路を移動している間に、これが私の「カンボジアで考えたこと」でした。

（大阪事務所 よしだ くみこ）

新刊旧刊書評紹介

安井潤一郎 著

講談社

「スーパーおやじの痛快まちづくり」

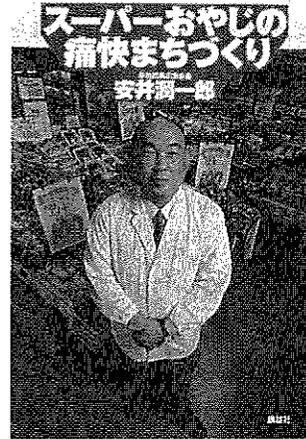
紹介 高田 剛司

本誌91号では『ゼロエミッションからのまちづくり』（早稲田いのちのまちづくり実行委員会編著）を取り上げ、東京にある早稲田商店会のまちづくりを紹介しましたが、本書は、そのキーパーソン「安井潤一郎」さんが書いた本です。これまでの3年間のまちづくり秘話を軽妙な語り口で綴っています。

食料品スーパー「稲毛屋」の社長、安井さんは、1993年に誰もなり手がなかった早稲田商店会の会長職に仕方なく就任。環境と共生をテーマに早大キャンパスで実施した「エコサマー・フェスティバル」の動機は、夏休みに3万人の早大生（すなわち消費者）がいなくなる「夏枯れ」対策だった…。ストーリーは、こんなところから始まります。

1996年から始めたエコサマー・フェスティバルをきっかけに、ごみゼロ平常時実験、エコ・ステーション設置など環境への取り組みを次々と仕掛けてきた「スーパー」おやじの、いかにお金をかけずにイベントを成功させるかという哲学は商売人ならでは。リサイクルという言葉も商売に結びつけてしまう発想、「楽しくて儲かるまちづくり論」は、早稲田のまちづくりが成功している秘訣を教えてください。

また、安井さんを巡る人間模様はとにかく楽しく、多彩です。行政や早稲田大学、企業を巻き込み、今年6月には「第1回全国リサイクル商店街サミット」を開催して、全国の商店街とネットワークするなど、その行動力と情報力には圧倒されます。本書の中では、障害を持つ人たちとの出会いや、あの『五体



不満足』の著者、乙武洋匡さんも登場します。

まちづくりによるたくさんの人々との出会いを通じて、安井さんが感じたこと「まちづくりに関わっていくことの楽しさは、それによって心が豊かになり、自分がトクしていると思えることに、どうやら一番の価値があるようなのである」という一節に、安井さんがまちづくりにハマった理由が込められているのではないのでしょうか。

近年では、全国的に商店街のシャッター街化が進み、中心市街地の活性化が叫ばれています。中心市街地活性化法が施行され、国の補助事業メニューもたくさん用意されましたが、結局のところ、安井さんのような地域の「スーパー」なおやじたちのやる気と周りの盛り上がり、まちづくりに重要な役割を果たすのだと、改めて認識させられました。

商店街や中心市街地の活性化に悩んでおられる方、不景気の世の中で気が滅入っている方に、是非お奨めしたい元気の出る一冊です。

（大阪事務所 たかだ たけし）

まちかど

ガーデニングはポケットパークで!

角南 禎子

大阪府の南、泉州地域に位置する高石市では、市街地再開発事業や土地区画整理事業、密集住宅市街地整備促進事業の推進のために市が先行的に買い取った用地を活用して、さまざまなイベントや暫定整備が市民参加で進められています。まず、高石駅西側の地区ではポケットパーク（小公園）として昨年度市が独自に3箇所まで暫定整備をしましたが、今年度は、さる10月24日にガーデニングによる市民参加のポケットパークづくりが行われました。当日は、日曜日の午後ということもあり約30名の市民参加のもと『ガーデニング講習会』として講師を迎え、寄せ植えの講習と植物の育て方などの講義を受け、その実践の場として市の先行買い取り用地の一つでガーデニング体験が行われました。また、この他にも駅前先行買い取り用地が、菊花展に利用されています。通常は、高いフェンスで囲まれた味気ない空き地となることが多く、ひどい場合にはごみ捨て場となり、地区の活気を低下させてしまうのですが、当該地区では、まちに潤いを与え愛着の持てるポケットパークとして地域に開放されています。

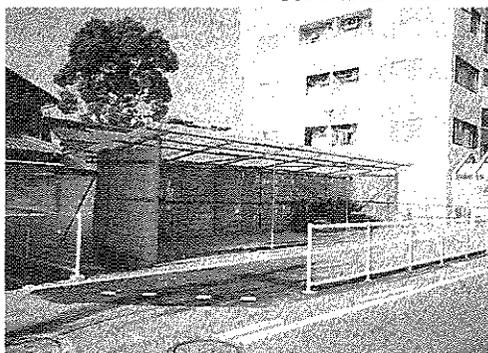
さらに、12月5日には駅東の市用地を活用して商工会議所商店連絡会主催のイベント「高石楽市楽座」が開催されます。このようなハードとソフトが連携した新しいまちづくりの動

きが広がり、将来「ほんとうのみんなのまち」に生まれ変わる第一歩となることが期待されます。

(大阪事務所 すなみ ていこ)



みんなの花壇が完成
ガーデニング講習会の成果もあって
美しい花壇ができました



菊花展の準備
駅のホームから菊の花がみえるのです



高石楽市楽座のポスター
ちょっと早めのクリスマスを12月上旬に催します

アルバック (株)地域計画建築研究所

- 本 社
- 京都事務所 〒600-8007京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82・大和銀行京都ビル6F / TEL(075) 221-5132 FAX(075) 256-1764
- 大阪事務所 〒540-0001大阪市中央区城見1-4-70・住友生命OBPプラザビル15F / TEL(06) 6942-5732 FAX(06) 6941-7478
- 名古屋事務所 〒460-0008名古屋市中区栄3-18-1・ナディアパークビジネスセンタービル13F / TEL(052) 265-2401 FAX(052) 249-3925
- 東京事務所 〒160-0022東京都新宿区新宿2-5-16・霞ビル401 / TEL(03) 3226-9130 FAX(03) 3226-9560
- 九州事務所 (株)九州地域計画研究所 〒810-0001福岡市中央区天神1-15-35・ホンダハビエ5F / TEL(092) 731-7671 FAX(092) 731-7673